

論文

中国雲南省の観光をめぐる動態と戦略

松村 嘉久

大阪経済法科大学 東アジア研究 第32号 抜刷
2001年5月発行

中国雲南省の観光をめぐる動態と戦略

松村 嘉久

- I はじめに
- II 雲南省における観光の動態
 - (1) 雲南省の概観
 - (2) 国際観光の動態
 - (3) 国内観光について
- III 雲南省の観光発展をめぐる要因分析
 - (1) 低迷する1980年代の雲南観光
 - (2) 1990年代の雲南観光をめぐる
- IV 21世紀に向けての雲南観光戦略
 - (1) 西部大開発と雲南観光戦略
 - (2) 民族文化大省建設への道のり
- V おわりにかえて

キーワード：雲南、観光、少数民族、戦略、
開発、メコン河

1. はじめに

中国観光は国家旅游局による観光政策などを背景に、1990年代に著しい成長を遂げてきた。本稿が対象とする雲南省は、1990年代の急成長を牽引した中国有数の観光目的地の一つである。1998年の統計によると、雲南省は中国第7位の

国際観光目的地であり、海外同胞を除いた外国人観光客の目的地としては第5位を占めている。中国の主要な国際観光目的地が沿海部に集中するなか、雲南省は中国西南の内陸部辺境に位置する点で他に例を見ない。

雲南省における観光をめぐる政策や動態は、中央政府や国家旅游局によるマクロなそれと連動している部分も多い⁽¹⁾。しかしながら、雲南省は自らが保有する観光資源、自らが置かれた国際環境や地理的特性などを見据えて、独特の観光戦略を立案して観光政策を展開してきたという側面も少なからず存在する。

雲南省における観光開発は、これまで環境問題⁽²⁾、経済発展⁽³⁾、民族社会の変容⁽⁴⁾などと絡めて議論されてきている。本稿では、まず雲南省における観光の動態を踏まえたうえで、国際環境の変容や観光インフラの整備などに着目しつつその成長要因を分析したい。さらには、21世紀に向けて雲南省がどのような観光戦略で臨んでいるのか、1992年にアジア開発銀行が打ち出した大メコン圏経済協力計画（Greater

(1) 中央政府や国家旅游局による観光政策と中国全体での観光をめぐる動態は拙稿を参照していただきたい。松村嘉久・辻本雄紀「中国におけるツーリズムの発展と政策」東アジア研究26、1999年、15～38頁。
(2) 村上勝彦・磯野弥生・手塚真ほか「中国雲南における観光開発と環境問題—1996年度調査報告（1）—」東京経大会誌205、1997年、79～139頁。

(3) 磯野弥生・堺憲一・手塚真ほか「中国雲南における観光開発と経済発展—1997年度調査報告—」東京経大会誌213、1999年、67～132頁。
(4) 長谷川清「観光開発と民族社会の変容—中国雲南省・西双版纳タイ族自治州の事例—」（佐々木信彰編著『現代中国の民族と経済』世界思想社、2001年6月刊行予定）。

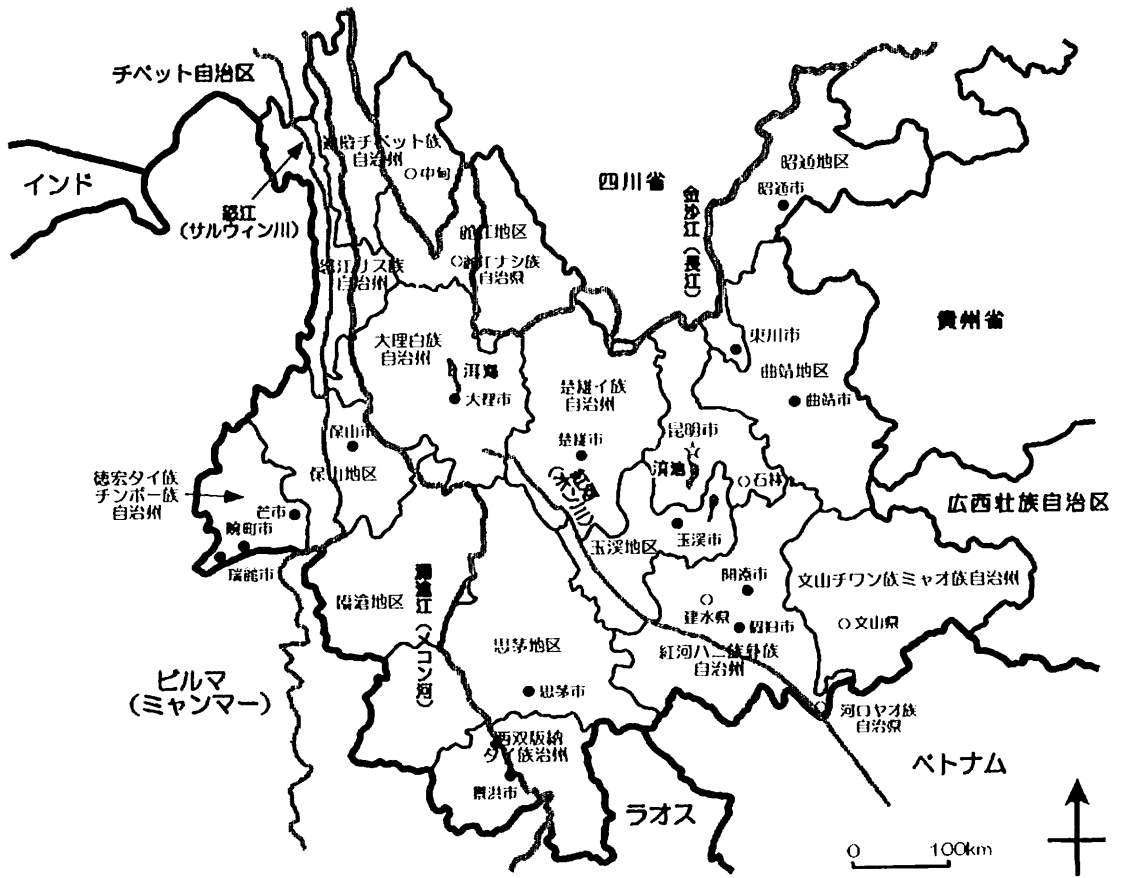


図1 雲南省の概略図

Mekong Subregion Economic Cooperation Program、以下GMS計画と略す)、中央政府が国家事業として打ち出した西部大開発などと絡めて明らかにしたい。

II 雲南省における観光の動態

(1) 雲南省の概観

中国西南端に位置する雲南省は、ミャンマー・ラオス・ベトナムと国境を接し、チベット自治区・四川省・貴州省・広西壮(チワン)族自治

区と省境を接する(図1参照)。総面積は日本とほぼ同じ39.4万平方kmで、省都は昆明市におかれ、1998年末現在、16地区(8自治州・6地区・2直轄市)、122県級行政単位に区分されている。

雲南省西部には、西から怒江(サルウィン川)・瀾滄江が北から南へと流れている。瀾滄江はメコン河の上流にあたり、ミャンマー・ラオス・タイの国境地帯からカンボジア・ベトナムへと流れるアジア最大の国際河川である。この他に、長江の上流にあたる金沙江が大きく湾曲して四

川省へと流れ、紅河（ホン川）がベトナムへと流れている。

雲南省内の海拔高度は、チベット高原東南端にあたる西北部で高く、南部・東南部・東部に向かうにつれて低くなっていく⁽⁵⁾。省内最高海拔は怒江と瀾滄江の分水嶺となっている太子雪山（6,740m）で、最低海拔はベトナム国境沿いの河口ヤオ族自治県（76m）であり、両地点の直線距離は900kmほどしかない。雲南省の地形は総じて起伏に富み、山地と高原が総面積の94%を占めている。

観光とも深く関連する気候はモンスーンの影響を受け、一般に、冬・春は乾季、夏・秋は雨季に区分される。ただし、海拔高度差の影響もあり、雲南省内には、万年雪を抱いた高山寒冷地帯からトロピカルフルーツの実る亜熱帯地帯まで、多様な自然環境が並存している。年平均気温は4.7～23.7℃と所により大きく異なり、省内の平均気温差は19℃にも達する。この差は黒龍江省から海南省までのそれとほぼ等しく、雲南省は中国で最も多様な自然環境に恵まれたところと言えよう。

雲南省には、中国の他の地域では見られないもう一つの大きな特徴がある。1990年センサスによると、雲南省の総人口は3,697万人で、そのうちの33.4%が少数民族人口で占められていた。現在中国では55少数民族が国家により認定されているが、雲南省にはそのうちの24民族が人口15,000人以上の規模で居住している。なかでも、ハニ（哈尼）族・タイ（傣）族・リス（傈僳）族・ラフ（拉祜）族・ワ（佤）族・ナシ（納西）族などの14民族は、総人口の90%以上が雲南省に居住しており、中国でも雲南省で

しか出会えない少数民族である。加えて、雲南少数民族は総じて下部集団が多く、例えば同じハニ族に分類されていても、居住地が異なれば伝統文化や民族衣装なども微妙に異なる場合もあり、国家により認定されていない未識別民族（苦聰人や克木人など）も住んでいる。雲南省は中国のなかでも有数の多民族地帯であると同時に、最も多様な少数民族と出会える場でもある。

多様な自然環境から生み出されてきた自然景観と、多様な少数民族が築き上げてきた人文社会景観は、いわゆる伝統的な中国文化に根差したものと異なり、雲南省特有の観光資源となっている。

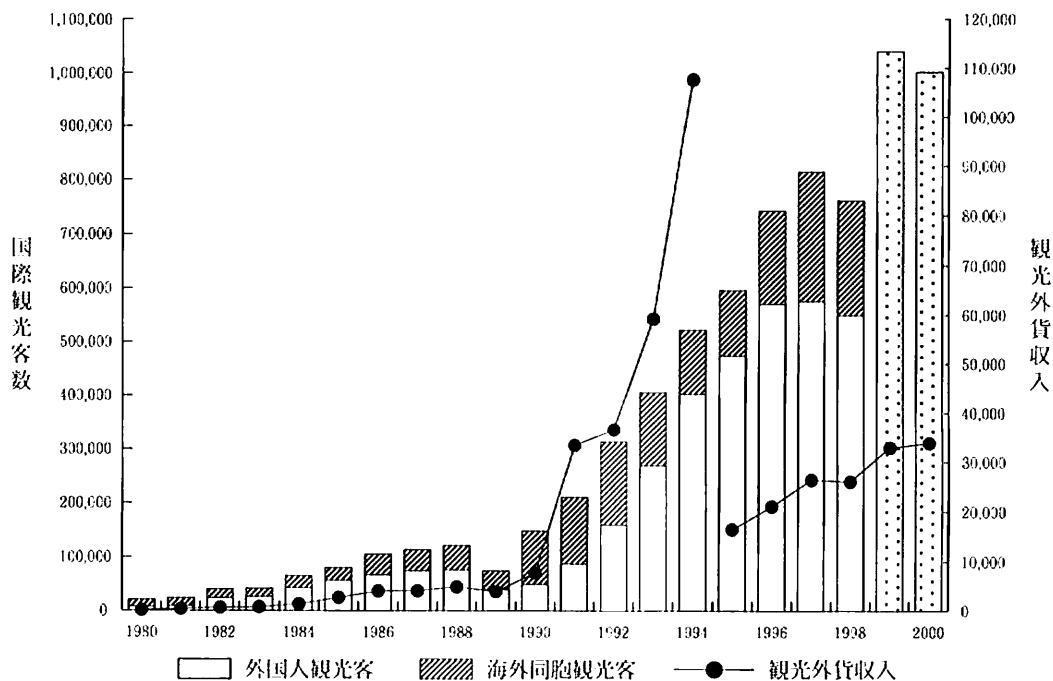
(2) 国際観光の動態

1977年以前、雲南省を訪れる国際観光客は極めて少なかった。1956～1966年に雲南省を訪れた国際観光客は約5,000人、文化大革命期（1966～1976年）は約3,000人程度で、自費による観光客は皆無に等しかったとされる⁽⁶⁾。当時は国際観光の取り扱い認可を受けたエイジェントも、中国国際旅行社昆明分社（1956年設立）と雲南華僑旅行社（1958年設立）の二つしかなかった。1977年以前の国際観光客は、ほとんどが帰国華僑・在中大使館員・社会主義圏同胞国からの観光客などで占められ、雲南国際観光は親族訪問・保養・政治接待などを中心に展開してきた。

鄧小平政権下で改革開放が始まった1978年、雲南省を訪れた国際観光客はわずか1,299人しかいなかった。ところが、翌1979年には13,444人、個人による中国観光が解禁された1982年に

(5) 雲南省の自然地理は以下の文献を参照した。雲南省地方志編纂委員会編纂『雲南省志巻1 地理志』雲南人民出版社、1993年。

(6) 雲南省地方志編纂委員会編纂『雲南省志巻68 旅游志』雲南人民出版社、1996年、3頁。



注) 海外同胞は華僑および香港・マカオ・台湾人を指す。1999年と2000年の観光客数は総数である。1995年以降の観光外貨収入の単位は(万US\$)、それより前は(万元)である。

資料) 1994年までの統計は、『雲南省志巻68 旅游志』、1995～1998年は『雲南統計年鑑 1996』および『中国統計年鑑 1999』、1999～2000年は <http://www.yndaily.com/> で検索した新聞記事より。

図2 雲南省における国際観光の推移(1980～2000年)

は40,468人へと急増していく。雲南省における国際観光は、スタート地点こそ低かったものの、1980年代に入って萌芽期を迎える。

1980年代の雲南省の国際観光は、天安門事件の発生した1989年を除いて着実に発展してはいるものの、1990年代の急激な増加と比較すると低迷していた観が否めない(図2参照)。国際観光客数は1986年に10万人の大台を突破したが、天安門事件の影響で1989年に前年実績を大きく割り7.4万人にまで落ち込んだ。1980年代には観光外貨収入も国際観光客数と同じような動向を示し、1988年の4,880万元をピークに低迷していた。

1990年に国際観光客数は14.8万人へと回復するが、これは海外同胞観光客が1989年の3.4万人から9.8万人に急増したことに起因しており、外国人観光客は前年と比較して1万人弱増加したに過ぎなかった。1990年は香港から昆明への直行航空便が拡充され、1987年10月に解禁された台湾人の訪中観光が雲南省で本格化した年でもあった。国際観光客数に占める海外同胞観光客の割合は、この1990年にこれまでで最高の66.4%を記録したあと徐々に低下し、1990年代半ば以降は20%台で落ち着いている。

1990年代に入ると雲南国際観光は、1998年こそアジア経済危機の影響を受けて前年実績割れ

表1 国籍別に見た国際観光客の動向

順位	1990年			1994年			1997年		
	国籍	実数	比重%	国籍	実数	比重%	国籍	実数	比重%
1	日本	12,629	25.4	タイ	89,374	22.2	タイ	71,683	12.5
2	アメリカ	5,591	11.2	シンガポール	67,161	16.7	シンガポール	67,301	11.7
3	イギリス	3,392	6.8	マレーシア	44,111	11.0	日本	57,305	10.0
4	西ドイツ	2,863	5.8	日本	34,776	8.6	アメリカ	37,820	6.6
5	タイ	2,705	5.4	アメリカ	24,117	6.0	イギリス	20,139	3.5
6	フランス	2,411	4.8	イギリス	13,996	3.5	ドイツ	17,320	3.0
7	シンガポール	1,711	3.4	ドイツ	13,874	3.4	フランス	10,901	1.9
8	イタリア	1,542	3.1	フランス	13,397	3.3	オーストラリア	8,898	1.5
9	オーストラリア	1,321	2.7	オランダ	6,964	1.7	インドネシア	7,449	1.3
10	カナダ	958	1.9	イタリア	6,189	1.5	イタリア	6,177	1.1
番外	その他諸国	14,664	29.5	その他諸国	88,373	22.0	その他諸国	270,605	47.0
番外	海外同胞	98,379	66.4*	海外同胞	119,727	22.9*	海外同胞	238,465	29.3*

注) 海外同胞の比重% (*印) は国際観光客数に占める割合で、その他諸国は外国人観光客数に占める割合である。

1997年の統計はマレーシアなどの実数が不明なので、順位は必ずしも正確ではない。

資料) 1990/1994年の統計は『雲南省志巻68 旅游志』、1997年の統計は『雲南統計年鑑1998』より。

を記録したものの、驚異的な急成長を遂げていく。1994年に50万人を突破した国際観光客数は、1999年に100万人の大台に達した。とりわけ外国人観光客の増加が顕著であり、1996年からは常に50万人を超えている。1999年と2000年は手元に資料がないため不明であるが、おそらく70万人台に達していよう。観光外貨収入は為替変動の影響を受け、1995年以降は従来の元換算でなくドル換算で統計が発表されているため、1980年代と単純に比較はできないが、1990年代に入って国際観光客数以上の急成長を遂げてきたと見てよからう。

1990年代には雲南省を訪れる外国人観光客の国籍構成にも大きな変化があった。1980年代から1990年代初めにかけて、雲南省への外国人観光客は、日本やアメリカ・イギリスなど欧米先進諸国からが大部分を占めていた。ところが表

1に示したように、1990年代半ばあたりから、タイ・シンガポール・マレーシアなど東南アジア諸国からの観光客が急増し、近年では上位を占めるようになってきている⁽⁷⁾。1990年代の雲南国際観光をめぐるのは、東南アジア諸国にまで観光マーケットが拡大し、ゲスト国が多様化したのも大きな特徴と言えよう。

次に国際観光の動態を地区別に見ると、国際観光客数からは1990年代に入って、徐々にではあるが省都昆明一極集中型から脱却しつつある傾向が伺える(表2参照)。1997年現在、国際観光ゲートウェイの昆明から、かなりの観光客が大理・麗江・保山・徳宏・西双版纳・紅河・迪慶などへ足を伸ばし、思茅や臨滄を訪れるものも少なくない。地区人口1万人あたりの国際観光客数を示す人的インパクトでは、中甸空港が整備された迪慶チベット族自治州などでも高

(7) 統計上の制約により、1997年のマレーシアからの観光客数は得られなかったが、おそらく上位を占めていると思われる。近年では昆明・ソウル直行便が就航し

ているため、韓国からの観光客も増加していると思われる。

表2 地区別に見た雲南省の国際観光の動向（1991～1997年）

地区	1991年 国際観光客数		1994年 国際観光客数		1997年 国際観光客数		
	実数	比重%	実数	比重%	実数	比重%	人的インパクト*
昆明市	160,165	76.1	378,672	72.5	510,116	60.8	1,329.1
大理州	22,443	10.7	34,579	6.6	55,368	6.6	172.5
大理市のみ	22,046	10.5	25,662	4.9	—	—	—
麗江地区	5,679	2.7	16,885	3.2	48,424	5.8	449.1
保山地区	984	0.47	23,146	4.4	42,671	5.1	186.9
徳宏州	6,448	3.1	14,311	2.7	29,449	3.5	298.1
西双版纳州	8,460	4.0	15,312	2.9	46,986	5.6	560.4
思茅地区	2,915	1.38	3,137	0.60	15,093	1.80	66.5
楚雄州	3,178	1.51	1,801	0.34	973	0.12	4.0
玉溪地区	208	0.10	257	0.05	1,168	0.14	6.0
曲靖地区	58	0.03	14	0.00	1,004	0.12	1.76
紅河州	—	—	33,742	6.5	43,000	5.1	111.5
迪慶州	—	—	—	—	28,848	3.4	874.4
文山州	—	—	—	—	1,255	0.15	4.0
臨滄地区	—	—	—	—	14,569	1.74	69.3
怒江州	—	—	—	—	493	0.06	10.8
その他の地区	—	—	203	0.04	231	0.03	0.47
全省総計	210,538	100.0	522,059	100.0	839,648	100.0	212.9

注) 国際観光客数の単位は(人・回)。人的インパクト*は地区人口1万人あたりの国際観光客数を指す。

1997年の国際観光客総数(814,063)と地区別総計(839,648)は合致しないが、後者を引用した。

資料) 1991/1994年の統計は『雲南省志巻68 旅游志』、1997年の統計は『雲南統計年鑑 1998』より。

い値になっている。

先に見た外国人観光客の国籍構成の変化ほど劇的ではないが、1990年代に国際観光をめぐる雲南省内の地域構造にも、変化の兆しが芽生え始めていると言えよう。ただし、近年の省内航空交通網の発達により、昆明を起点として省内の著名な観光地をめぐるツアーも可能になっているので、観光外貨収入の昆明一極集中は、国際観光客数のそれほどには緩和されていないものと推察される。

(3) 国内観光について

雲南省を訪れる国内観光客の統計は、今のところ系統的には公表されていない。しかしながら、雲南観光を考察するには欠かせないので、ここでは断片的な情報からその動態に迫りたい。

1980年代の雲南省にも、当然のことながら国内観光客は存在した。雲南屈指の観光地である石林には、1980年から1988年の間に35.1万人の国際観光客が訪れたのに対し、国内観光客は566.3万人にも達した⁽⁸⁾。観光インフラの整備が遅れていた1980年代の中国では、外貨を落と

(8) 昆明市路南彝族自治州県志編纂委員会編『路南彝族自治

州志』雲南民族出版社、1996年、471～472頁。

す国際観光客と競合する国内観光客は無条件で歓迎されるものではなかったが、雲南省へは1980年代から国際観光客をはるかに凌駕する国内観光客が訪れていたことは確かであろう。

中国国民による国内観光は、国家旅游局が1993年11月に提出した『关于積極發展国内旅遊業意見』を契機に、全国的に積極的な育成が試みられるようになる。雲南省ではこれに先立って、1993年2月に雲南省人民政府が提出した『关于大力發展旅遊業的意見』のなかで、国際観光とともに国内観光も積極的に育成する方針が打ち出されていた⁽⁹⁾。このなかで国内観光に関する具体的な計画目標として、第八次5ヶ年計画末期(1995年)までに、国内観光客を1,500万人、国内観光収入を15億元に増加させ、さらに第九次5ヶ年計画末期(2000年)までに、国内観光客を2,000万人、国内観光収入を30億元に増加させることが掲げられた。

最近の報道によると、1999年に雲南省は3,674万人の国内観光客を受け入れ、その観光収入は176.9億元に達したとされる⁽¹⁰⁾。国際観光客は図1に示したように2000年に前年実績割れを記録した。しかしながら、国内観光客の方は3,841万人へと増加し、第九次5ヶ年計画期(1996年～2000年)の累計で、1億4,566万人の国内観光客を受け入れ、国内観光収入は621.9億元にも及んだと報道されている⁽¹¹⁾。中国沿海地域の順調な経済発展を背景に、国際観光客とは桁違いの規模で国内観光客が雲南省に流入していることは確かであろう。

表2に1997年における国際観光客の人的インパクトを示したが、こうした国内観光客を考慮

に入ると、その数字は一桁、ところによっては二桁変わる可能性が高い。

こうした国内観光は国際観光よりも季節性が高く、中国の長期休暇である「春節(旧正月)」・「五一(メーデー)」・「十一(建国記念日)」に比較的集中することが、近年雲南省でも問題となっている。1990年代後半あたりから、こうした長期休暇になると、雲南省の主要な観光地はことごとくパンク状態に陥ってきた。2000年の「五一」期間、中甸や西双版纳では既存の宿泊施設で観光客を収容しきれず、緊急措置として少数民族の民家を提供したとも言われている。

中国沿海地域を起点として雲南省の主要な観光地を巡り、辺境観光へ赴くパッケージツアーは、一人あたり5,000元から10,000元くらいの価格帯で販売されている。この価格帯は沿海地域住民にとって今や十分に手の届く範囲にあり、手軽な「外国旅行」感覚を楽しめる雲南観光は、今後も発展していくに違いない。

III 雲南省の観光発展をめぐる要因分析

(1) 低迷する1980年代の雲南観光

前章で見たように、1980年代の雲南省における国際観光は低迷し、国内観光も1990年代ほど盛んではなかった。1980年代の雲南観光が低迷した要因としては、①国際観光客の訪問が許される対外開放都市が少なく、②交通インフラが未整備で観光資源の制度化や開発もあまりなされていなかった、という二点が挙げられる。

1980年代初頭、雲南省の対外開放都市は、昆明市と路南彝族自治州(石林)のみで⁽¹²⁾、1984

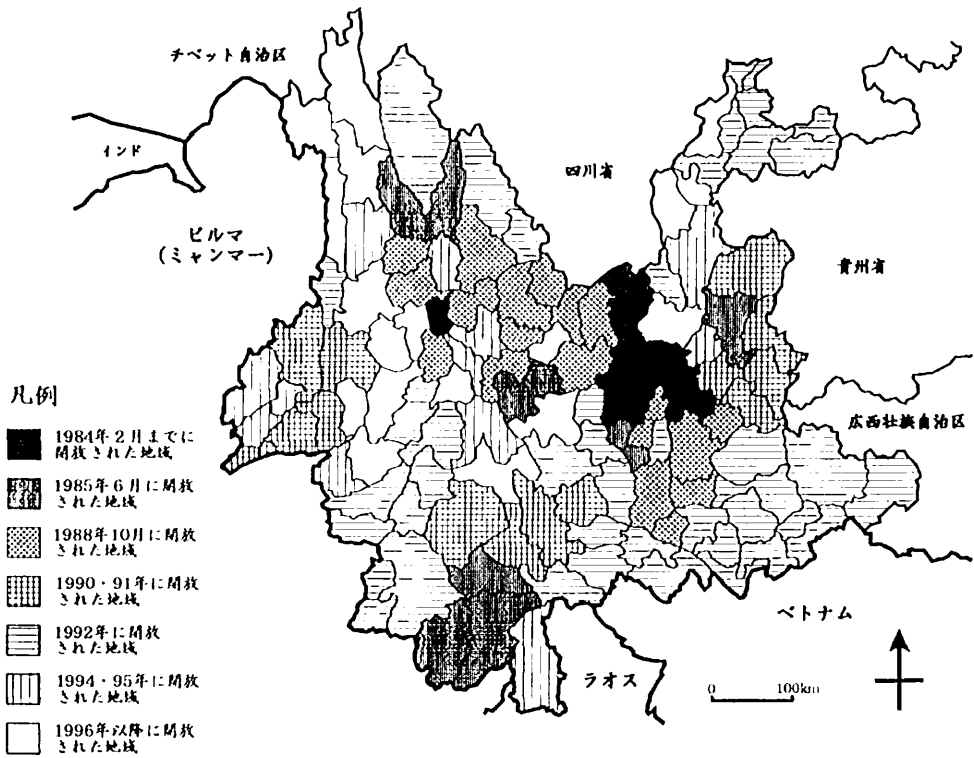
(9)この全文は、前掲注(6)の404～407頁に掲載されている。

(10)新華社昆明2000年2月27日「雲南加快培育旅遊支柱产业」、新華社昆明2000年2月27日付の報道より。以下、本稿で引用する新聞記事などは、断りのない限り、

『雲南日報』のホームページ(<http://www.yndaily.com>)で検索した。

(11)「雲南崛起西部旅遊“龍頭”」、2001年2月17日付けの『雲南日報』の記事より。

(12)昆明市の管轄下にある県や区も対外開放地域に含ま



資料) <http://www.yunnan.com.cn/ymsurvey/title04/chaapt019/prgph01/content1.htm> より。

図3 雲南省における対外開放都市の空間的展開

年2月に大理が対外開放都市に指定されてようやく3ヶ所になった(図3参照)。昆明と大理は1982年に国家級歴史文化名城に指定されており、路南石林と大理は同じく1982年に国家級風景名勝区に指定されていた。いずれも国家の権威のもと制度化された観光資源であった。

1980年代半ば、雲南唯一の観光ゲートウェイであった省都昆明へのアクセスは、飛行機と鉄道に限られており極めて不便であった。昆明と中国主要都市を結ぶ国内航空ルートはわずか13

本、国際航空ルートは香港・ヤンゴンを結ぶ2本、昆明国際空港を離着陸する飛行機は毎週72便しかなかった。鉄道でのアクセスは貴昆鉄道・成昆鉄道の二つがあったが、列車本数も少なく観光客輸送能力は低かった。国際観光客は中国国際旅行社を通して飛行機や鉄道のチケットを優先的に入手できたが、いずれの運賃でも普通料金の二倍近い外国人料金が設定されていた。当時は絶対的な観光客輸送能力が低かったので、たとえ優先的にチケットが手配されてもそ

れていたが、国際観光客が宿泊できるホテルが限定されていたため、事実上は昆明市内にしか宿泊できなかった。路南彝族自治州でも宿泊できるのは観光地の石林

だけで、県内の他地域に足を踏み入ると何かと問題が生じた。

の入手は困難であった。1980年代半ばまで、最大のゲスト国であった日本でさえ、アクセスの悪い雲南省が中国観光のパッケージツアーに組み込まれることはほとんどなかった。

こうした交通事情に大きな変化はなかったが、1985年6月に観光資源としての高い潜在力を秘めた諸地域（西双版纳タイ族自治州や麗江纳西族自治县など）が対外開放された。その翌年には『关于加速发展云南旅游事业的报告』が雲南省政府に提出され、雲南観光は新たな一步を踏み出す。図3で確認できるように、1985年6月までに開放された地域は、省都昆明とその周辺を中心として、空間的には飛び地状に展開していた。魅力ある観光資源を有する地域が含まれたこの空間的配置は大きな意味を持った。

省都昆明から当時開放されていた主要な観光地への移動手段はバスしかなく、大理へは約10時間、麗江へは大理からさらに約6時間、西双版纳へは1泊2日か2泊3日かかった。西双版纳へのアクセスは、昆明から思茅まで飛行機を利用する方法もあったが、便数は週1便しかなく、思茅から西双版纳まではさらにバスで約2時間かかった。つまり、観光ゲートウェイの省都昆明へのアクセスがそもそも悪く、そこから飛び地状に展開する魅力的な観光地へのアクセスはさらに悪いという状況であった。ところが、昆明を離れ大理・麗江・西双版纳まで到着すると、一日あたり10ドル以内で宿も食事も十分に確保でき、雲南でしか味わえない少数民族との出会いが楽しめたため、制度化されない国際観光客（個人旅行者・バックパッカー・貧乏旅行者など）たちの人気を集めた。

1980年代半ばを過ぎると、中国主要都市から昆明へのアクセスは徐々に改善され、雲南省にも中国内外から制度化された観光客（パッケージツアーなど）が訪れるようになった。しかし

ながら、彼らは時間に制約されていたため、省都昆明に宿泊して石林観光をするのが限界で、大理・麗江・西双版纳などへ足を伸ばすツアーは、ほとんど組まれていなかった。一方で、制度化されない観光客たちは、飛び地状に展開する観光地へと足を伸ばし、そこにいたるまでの肉体的・精神的疲労を極すように、数ヶ月にわたって滞在する者も少なくなかった。

制度化されない観光客たちが荷をとく安宿街には、地元少数民族の料理はもちろん、西洋料理や日本料理も提供するレストラン、民族色豊かな観光みやげを制作販売する店舗などが次第と集積するようになった。これらの多くは民間部門の個人営業者で、金はないが時間はたっぷりある観光客たちの細かいニーズに対応し、観光客との気長なやりとりのなかで急速に洗練されていった。大理城内のいわゆる「洋人街」や、タイ族料理のレストランが立ち並ぶ西双版纳の曼景蘭などはこの好例であろう。暇を持て余した制度化されない観光客のなかには、こうした安宿街を起点に新たな出会いと「発見」を求めて、周辺の農村や他の対外開放都市へと、時には未開放地帯にまで足を伸ばす者も少なくなかった。こうした制度化されない観光客たちが、1980年代の雲南観光開発、とりわけ飛び地状に展開した民族観光地の開発に果たした役割は大きい。

1990年代になると雲南省にもマス＝ツーリズム時代が到来して、地方政府主導による上からの観光開発が本格化するが、主要な民族観光地では民間部門による下からの観光開発がすでに進展しており、この両者の相互的かつ補完的な関係のなかで観光地としての魅力を増していく。

対外開放都市の指定により国際観光客を受け入れる地域が制限されていたことは、1980年代の観光開発にもう一つの重要な効果をもたらした

た。それは、雲南省政府や地方政府による限られた観光開発投資が地域的に分散することなく、対外開放都市とそれらをつなぐ交通インフラに集中でき、点と線の効率の良い観光開発ができたことにある。

雲南省政府は初歩的な国際観光の成功とその将来性を見据え、1986年に旅游規劃領導小組（観光計画指導グループ）を設置して観光戦略を練り上げ、第七次5ヶ年計画（1986～1990年）に盛り込んだ。1987年2月、当時の雲南省長・和志強は『关于雲南省第七次五年計劃的報告』のなかで、「民族特色を備えた観光資源を積極的に開発し、観光商品を大いに発展させ、経営・サービス水準を向上させ、観光産業を速やかに我が省で外貨獲得のできる重要産業に発展させる」との指針を明らかにした⁽¹³⁾。この頃から雲南省の観光開発は、対外開放都市のなかでも「民族特色を備えた観光資源」に重点が置かれるようになる。

その一方で、国家から与えられた枠組みで観光資源を制度化する準備も進められていた。雲南省政府は1986年5月に、『关于对我省風景名勝資源進行調査・評級・列級的報告』を省内各地に伝えて、観光資源となり得る風景名勝の調査に取り組むよう求めた。

1988年10月に、既存の対外開放都市に隣接する地域を中心として、新たに19対外開放都市が指定された。これらはいずれも雲南省の内陸部に位置しており、国境地帯は西双版納タイ族自治州を除いて未開放のままであった（図3参照）。

(2) 1990年代の雲南観光をめぐる

雲南観光をめぐる環境が大きく変容したのは

1992年だった。1992年の鄧小平南巡講話で中国の改革開放は一挙に加速され、ミャンマー・ラオス・ベトナムと隣接する雲南省でも、国境地帯が対外開放されて国境貿易や国境観光も認可された。加えて1992年には、雲南省を参加メンバーとするGMS計画がアジア開発銀行により提唱され、国家旅游局による全国規模の観光プロモーションも始まった。

1990年代に雲南観光が急成長した要因には、①対外開放が国境地帯も含めて急速に進展し、②観光資源の制度化と開発が急速に進み、③国家旅游局による観光プロモーションと連動して多様な観光イベントが実施され、④観光インフラが整備されていったことなどが挙げられる。以下では、雲南観光をめぐる環境の変容にも注目しつつ、上に挙げた四つの要因について言及したい。

〔対外開放の進展〕

1990年7月、西双版納タイ族自治州に次いで、雲南省西部のミャンマー国境地帯（徳宏タイ族チンポー族自治州と保山地区の一部）が対外開放都市に指定された。1980年代から雲南省国境地帯では隣接国との小規模な貿易活動が行われていたが、1992年6月国務院は昆明市に沿海部の対外開放都市と同様の待遇を与え、雲南省国境地帯の暹町市・瑞麗県・河口ヤオ族自治県における国境貿易と対外経済協力活動を正式に認可するという通知を出した⁽¹⁴⁾。実態として存在していた雲南国境地帯の対外経済交流は、こうして追認される。

この通知を呼び水として、雲南省とミャンマー・ラオス・ベトナムとの出入国や簡易ビザ（通行証）に関する規定が短期間で整備され⁽¹⁵⁾、1992

(13)前掲注(6)の4頁より。

(14)国務院『关于進一步対外開放南寧・昆明市及凭祥等五箇边境城鎮的通知』、1992年6月9日発布。http://

chinalaw.net より。なお、2000年末現在、瑞麗県は瑞麗市となり、暹町市は1999年4月に撤廃され瑞麗市に合併されている。

年末にはラオス・ベトナムとの国境地帯も含めて、一挙に43対外開放都市が指定された（図3参照）。このように急速な国境地帯の対外開放が可能となった背景には、鄧小平の南巡講話で改革开放が加速されたことはもちろん、GMS計画の準備作業として、雲南省と隣接諸国との間で緊密な打合せが積み重ねられていた点も見逃せない。1980年代とは対照的に、1990年代の対外開放は国境地帯から進展し、むしろ内陸部が取り残されるような空間的展開となった。

国境地帯の対外開放と並行して、雲南省と隣接諸国との間には、国務院または雲南省政府の批准を経て、「口岸」と呼ばれるボーダーが急速に整備されていく。1992年末現在で、国家級口岸が5ヶ所、省級口岸が12ヶ所、辺民互市点⁽¹⁵⁾が92ヶ所設置された。こうした口岸は貿易額・出入境人口の実績に応じて定期的に等級が見直され、近年では図4に示したように、国家級口岸10ヶ所（昆明国際空港・西双版纳国際空港を含む）、省級口岸8ヶ所が設置されており、辺民互市点は少なくとも86ヶ所存在する。こうした口岸から隣接諸国を短期間でめぐる辺境観光も、1992年に国内観光客向けに解禁され、積極的な育成が試みられるようになる。

雲南省旅游局が1991年5月に提出した『雲南省旅遊業發展十年規劃及“八・五”計劃綱要』では、新たなゲスト国として、東南アジア諸国の観光市場を開拓することが中長期目標の一つ

に掲げられていた。この目標も1992年における対外開放の進展でわずか数年のうちに達成され、第II章で見たように、雲南省を訪れる外国人観光客の国籍構成を大きく変えていく。なお、相互ビザ免除協定に基づいたミャンマー・ラオス・ベトナムから流入者は、毎年少なくとも百万人以上の規模に達していると予想されるが、統計上は国際観光客に含まれない。

1992年における雲南観光をめぐる劇的な環境の変容を踏まえて、雲南省人民政府は1993年の『關於大力發展旅遊業的意見』で事実上の観光立省宣言を出し、東南アジア国際観光市場との融合を目指した観光戦略を明確化する。

〔観光資源の制度化〕

現代中国で観光資源と認識され制度化されてきたものには、観光リゾート区（旅遊度假區）・歴史文化名城・風景名勝区などがある⁽¹⁶⁾。1997年末の雲南省では、ユネスコ世界文化遺産に認定された「麗江古城」をはじめとして、1国家級観光リゾート区・6省級観光リゾート区、5国家級歴史文化名城・3省級歴史文化名城、10国家級風景名勝区・48省級風景名勝区が制度化されている（表3参照）。最新の新聞情報によれば、省級風景名勝区は63ヶ所、省級歴史文化名城は6ヶ所、雲南省の風景名勝区の総面積は同省の3.3%を占め、その数と総面積はすでに中国でトップである⁽¹⁷⁾。

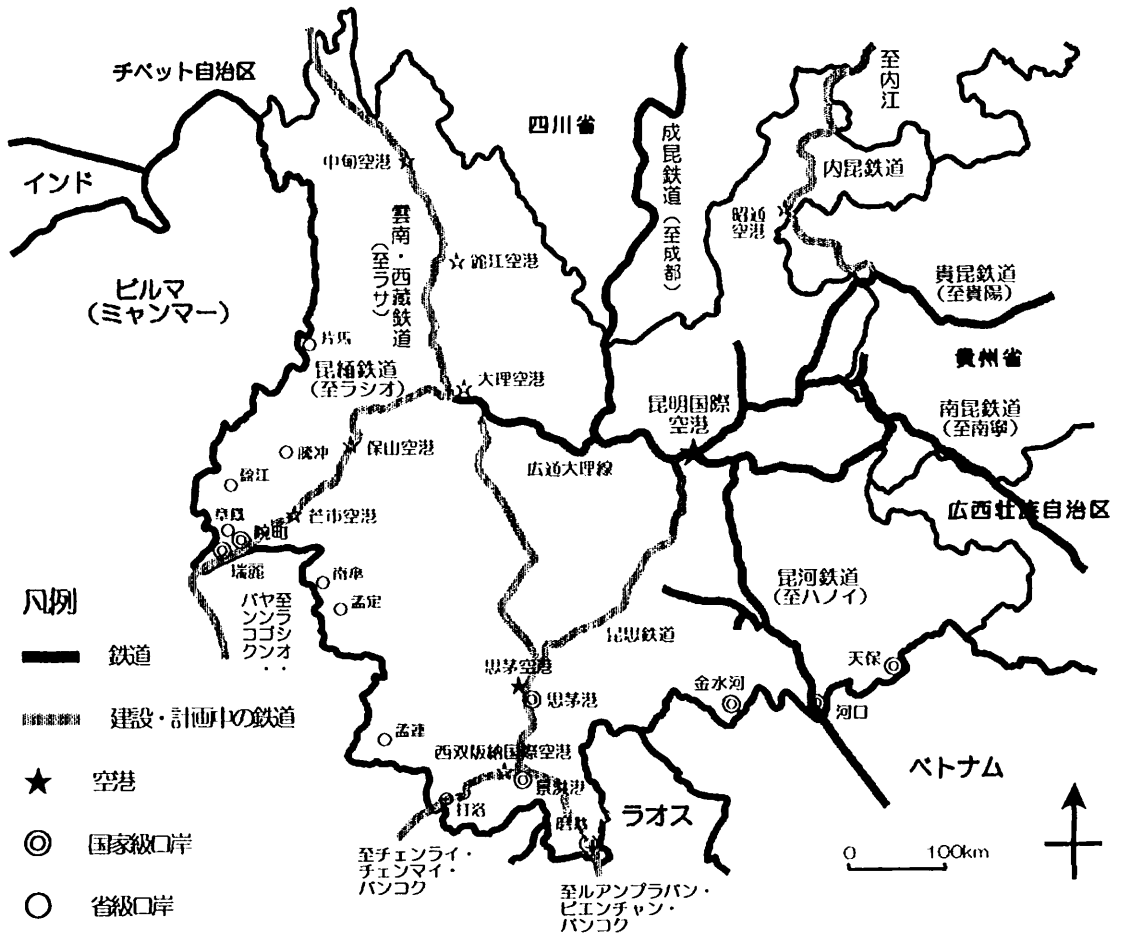
風景名勝区の調査は1980年代から実施されて

(15)例えば、①雲南省人民政府『雲南省中緬邊境地區中方人員出入境管理暫行規定』、1992年8月13日發布、②雲南省人民政府『雲南省中越、中老邊境地區人員出入境管理規定』、1992年8月31日發布など。1992年前後には、雲南省国境地帯の地区や県レベルでも、辺境貿易や出入境管理に関する法律が整備されていた。詳しくは、『雲南邊境經濟貿易全書』雲南人民出版社、1993年を参照していただきたい。

(16)隣接諸国住民も参加できる国境地帯の農村市場を指す。多くは定期市の形態で運営されている。

(17)これら観光資源の「再発見」とその法整備などは、別稿で分析したので参照していただきたい。拙稿「祖国中国をいかに見せるのか—観光、スペクタクル、中華民族主義—」中国研究月報623、2000年、1～26頁。

(18)「雲南風景區面積數量品位均居全國首位」、2001年2月25日付けの『雲南日報』の記事より。この記事によると、まだ申請中の風景名勝区もあるらしい。新たに認定された省級歴史文化名城は、制度化された年は不明だが、会澤・石屏・広南の三ヶ所である。雲南省にはこの他に歴史文化名村という枠もあり、禄勳県黒



(資料)『雲南對外通道及口岸』雲南人民出版社、1992年、『中国(車司機地図冊)』中国地圖出版社、1998年および <http://ynweb.yn.cei.gov.cn/ynsq/ynsq1.htm> などのホームページ情報を整理して筆者が作成した。

図4 雲南省の鉄道・空港・口岸

いたが、1992年9月に雲南省政府は『关于加快我省風景資源開發的意見的請示』を各地に通達し、風景資源の制度化に向けての取り組みを加速するよう促す。中国では観光スポットを整備し観光計画を立案した上で、観光資源としての制度化を国や省に申請するので、制度化された

時点で一定の観光開発がなされていると見てよい。表3には判明しているもののみ制度化された年を示したが⁽¹⁹⁾、省政府の積極的な取り組みを背景に、国家級の歴史文化名城や風景名勝区の一部を除いて、その他のほとんどは1990年代に制度化されてきた。昆明・大理・麗江・西双

\\井鎮・石屏県宝秀鎮が指定されている。

(19)省級風景名勝区は第一回(1988年)、第二回(1993年)、第三回(1996年)と定期的にまとめて指定されてき

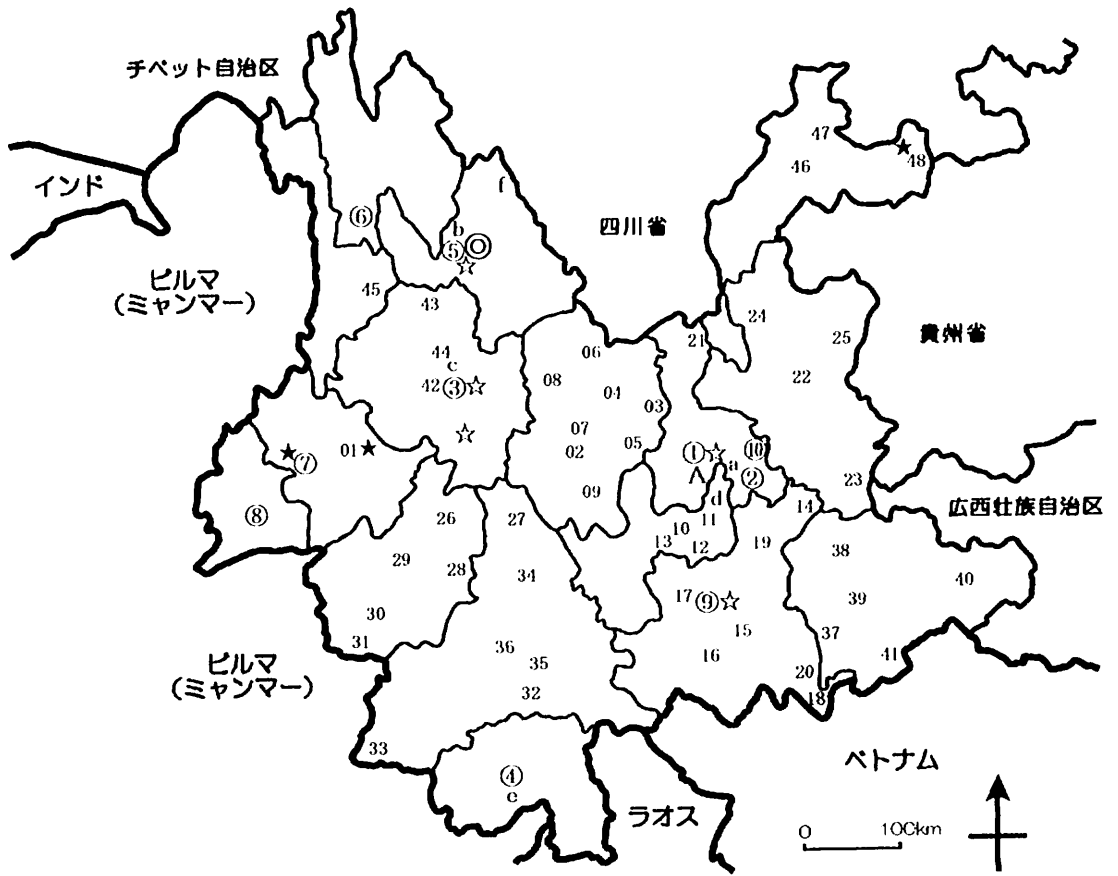
ており、制度化された年の判明していないものはおそらく1996年に指定されたと推察される。他のものも少なくとも、1995年以降に制度化されたと思われる。

表3 雲南省における制度化された観光資源の一覧表(1997年末)

ユネスコ世界文化遺産		省級風景名勝区(続き)	
◎	麗江古城(1997年)	09	双柏白竹山—磽嘉風景名勝区
	国家級観光リゾート区	10	玉溪九龍池風景名勝区(1993年)
A	昆明滇池観光リゾート区(1992年)	11	撫仙—星雲湖泊風景名勝区(1988年)
	省級観光リゾート区	12	通海秀山風景名勝区(1988年)
a	宜良陽宗海観光リゾート区(1993年)	13	峨山錦屏山風景名勝区(1993年)
b	麗江玉龍雪山観光リゾート区(1993年)	14	瀘西阿壩古洞風景名勝区(1988年)
c	大理観光リゾート区(1993年)	15	個旧蔓耗風景名勝区
d	玉溪撫仙湖観光リゾート区(1993年)	16	元陽観音山風景名勝区
e	西双版纳観光リゾート区(1993年)	17	石屏異龍湖風景名勝区
f	寧蒗瀘沽湖観光リゾート区	18	河口南溪河風景名勝区
	国家級歴史文化名城	19	弥勒白龍洞風景名勝区(1993年)
☆	昆明歴史文化名城(1982年)	20	屏边大圍山風景名勝区(1993年)
☆	大理歴史文化名城(1982年)	21	東川轿子山風景名勝区(1993年)
☆	麗江歴史文化名城(1986年)	22	曲靖珠江源風景名勝区(1988年)
☆	建水歴史文化名城(1994年)	23	羅平多依河—魯布革風景名勝区(1993年)
☆	巍山歴史文化名城(1994年)	24	会澤以礼河風景名勝区
	省級歴史文化名城	25	宣威東山風景名勝区
★	保山歴史文化名城(1993年)	26	雲県大朝山—干海子風景名勝区
★	騰冲歴史文化名城	27	景東漫灣—袁牢山風景名勝区(1993年)
★	威信歴史文化名城	28	臨滄大雪山風景名勝区(1993年)
	国家級風景名勝区	29	永徳大雪山風景名勝区
①	昆明滇池風景名勝区(1988年)	30	耿馬南汀河風景名勝区
②	路南石林風景名勝区(1982年)	31	滄源俱山風景名勝区
③	大理風景名勝区(1982年)	32	思茅茶馬古道風景名勝区
④	西双版纳風景名勝区(1982年)	33	孟連大黒山風景名勝区(1993年)
⑤	麗江玉龍雪山風景名勝区(1988年)	34	鎮沅千家寨風景名勝区
⑥	三江並流風景名勝区(1988年)	35	普洱風景名勝区
⑦	騰冲火山地熱風景名勝区(1994年)	36	景谷威遠江風景名勝区
⑧	瑞麗江・大盈江風景名勝区(1994年)	37	文山老君山風景名勝区(1988年)
⑨	建水風景名勝区(1994年)	38	邱北普者黒風景名勝区(1993年)
⑩	九郷風景名勝区(1994年)	39	巍山浴仙湖風景名勝区(1993年)
	省級風景名勝区	40	広南八宝風景名勝区(1988年)
01	保山博南古道風景名勝区(1993年)	41	麻栗坡老山風景名勝区(1996年)
02	楚雄紫溪山風景名勝区(1993年)	42	漾濞石門関風景名勝区(1993年)
03	武定獅子山風景名勝区(1988年)	43	劍川劍湖風景名勝区
04	元謀土林風景名勝区(1993年)	44	洱源西湖風景名勝区
05	禄豊風景名勝区(1993年)	45	蘭坪羅古箐風景名勝区
06	永仁方山風景名勝区(1993年)	46	大関黄連河風景名勝区(1994年)
07	牟定化佛山風景名勝区(1993年)	47	塩津豆沙関風景名勝区
08	大姚曇華山風景名勝区	48	威信風景名勝区(1988年)

注) 本表は図5に対応しており、表中の括弧内は制度化された年を示す。

資料) 龔正嘉編著『雲南旅游』雲南科技出版社、1997年および『雲南省志卷68 旅游志』雲南人民出版社、1996年より。



(注) 図中の判例は表3に対応している。(資料)表3に同じ。

図5 雲南省における制度化された観光資源の空間配置

版納など著名な観光地は、異なる枠組みで重複して制度化されているのも特徴であろう。こうして制度化された観光資源の空間的配置を図5に示したが、省都昆明周辺にいくぶん集中してはいるものの、雲南省全体に広く展開している。

表3には示さなかったが、中国では自然保護区も制約付きながら観光資源の一つと見なされており、雲南省は中国で最も自然保護区の数・面積が多いところである。最新の報道によれば、

雲南省には2000年末現在で、121ヶ所(国家級8ヶ所・省級49ヶ所・地区級および県級64ヶ所)の自然保護区があり、その総面積は雲南省の6.1%を占めている⁽²⁰⁾。雲南省の観光リゾート区のほとんどは、こうした自然保護区の周囲に建設されている。この両者の線引きがどのようになされ、共存共栄が図られているのかは定かでない。しかしながら、1990年代半ば以降の観光客の急増などを鑑みれば、観光産業の持続的

(20) 「雲南省自然保護区数量居全国第一」、2001年2月12

日付けの『雲南日報』の記事より。

発展と環境保護が両立できるのか否かが、雲南観光の重要な課題となろう。

〔多様な観光イベント〕

中国で最初の大規模な国家レベルの観光プロモーションが展開されたのは、1992年の1992中国友好観光年であった⁽²¹⁾。このプロモーションのなかで、雲南観光は「西南少数民族風情遊」と銘打って推奨されていた。「西南少数民族風情遊」の開会式とあわせて、1992年2月に省都昆明では雲南最初の大規模な観光イベントである第三回中国芸術節が同時開催された。昆明市内には雲南少数民族の伝統文化や風習を展示する施設が開設され、雲南各地から集まった少数民族たちが民族衣装でパレードも行った。雲南少数民族を展示するテーマパーク・雲南海埂民族村も、まだ建設途中であったがこの第三回中国芸術節にあわせてオープンされた。

1992年以降、国家旅游局が打ち出す全国的な観光プロモーションと連動して、雲南省でも省都昆明のみならず省内各地で観光イベントが行われるようになる。ここでは、雲南独自の観光イベントを中心に簡単に紹介しておきたい。

1993年12月に開催された「中国・タイ・ミャンマー・ラオス国際友好自動車ラリー」は、雲南省の全方位開放とGMS計画の進展を印象付ける象徴的なイベントであった。タイのチェンライからミャンマー・西双版纳経由で昆明までの道のりを往復するというラリールートは、GMS計画で立案されていたチェンライー昆明道路改良計画の青写真そのものであった。

1993年から現在まで毎年昆明で開催されている中国昆明輸出商品交易会（昆交会）も、厳密な意味での観光イベントではないが、集客力の

高いイベントである。これは中国西南地方の省・自治区・主要な都市が、東南アジアや南アジアとの貿易促進を目的に共同で開催しており、会期中の昆明では様々な雲南観光プロモーションも展開されてきた。西双版纳タイ族自治州では、GMS計画の一環として、1997年以来、中国・ラオス・タイ・ミャンマーの4カ国連合で「西双版纳辺境貿易交易会」も開催されている。

雲南最大の観光イベントは1999昆明世界園芸博覧会であろう。これは中国に初めて誘致された国際博覧会で、国家旅游局による観光プロモーション（1999中国生態環境遊）の看板イベントでもあった。図2で1999年に雲南省の国際観光客数と観光外貨収入が急増したことが確認できるが、これはこのイベントの集客力の成果と見てよい。2000年には第一回中国昆明国際旅游節と銘打たれ、省内各地区に分会場が設けられ、全省規模で雲南少数民族の伝統文化を全面に打ち出した観光イベントが展開した。2001年にも第二回中国昆明国際旅游節が開催される予定で、この観光イベントは昆交会のように定例化される。2001年からは隔年で中国国際旅游交易会が開催されることも決定している⁽²²⁾。

1990年代の雲南観光プロモーションでは、行政側からの積極的な働きかけのもと、巧みなメディア戦略も展開され、「雲南イメージ」の構築が中国内外で試みられてきたことも重要である。観光名所・雲南少数民族文化などを紹介する国内観光客向けのガイドブックはもちろん、雲南地方紙には観光専門欄が設けられ、『雲南旅游』という観光専門雑誌も発刊された。

日本・欧米・東南アジアなど主要なゲスト国では、雲南少数民族の伝統文化や風習が様々な

(21)国家旅游局による観光プロモーションは、前掲注(17)で分析したので、参照していただきたい。

(22)従来これは隔年で上海において開催されていたが、

2001年から毎年、上海と昆明で交互に開催されることになった。

メディアで紹介され、「少数民族の住む秘境・雲南」、「シャングリラ」といったイメージが構築されてきた。とりわけ日本では、「照葉樹林文化の源流」や「稲作の起源」といった学術的な関心が、マスメディアのブラックボックスのなかで増幅され、日本の原風景を求めるようなノスタルジックな雲南イメージも構築されてきた。タイでも西双版纳タイ族自治州に関する観光プロモーションが活発に展開され、「タイの原風景」といったノスタルジックなイメージが構築されつつある。

〔観光インフラの急速な整備〕

1990年代における雲南観光の発展を支えてきたのは、観光インフラの急速な整備であった。観光資源の制度化は先に検討したので、ここでは交通インフラの整備過程を中心に検討したい。

省都昆明と諸外国の大都市・中国の主要都市・省内の主要観光地とを結ぶ航空網は、1990年代に整備され、雲南観光へのアクセスを画期的に変貌させた。2000年末現在、雲南省内には二つの国際空港（昆明・西双版纳）と六つの地方空港が運営されており（図4参照）、臨滄地区に新たな地方空港が建設されている。雲南観光のゲートウェイである昆明国際空港は、中国沿海地域の主要都市はもとより、ラオス（ビエンチャン）・タイ（バンコク・チェンマイ）・ミャンマー（ヤンゴン）・シンガポール・マレーシア（クアラルンプル）・日本（大阪）・韓国（ソウル）・香港・マカオを結ぶ中国でも屈指の国際空港に成長した。昆明から大理・西双版纳などへは毎日省内便が飛んでおり、1999年には中甸空港も整備され、省内航空網も着実に充実しつつある。

雲南各地の空港と著名な観光地を結ぶ道路や、著名な観光地間を結ぶ幹線道路を中心に、1990年代には道路交通網の整備も大きく進展した。1990年末の道路距離総延長は56,536kmだったの

が、1998年末には約1.4倍の76,958kmになり、そのうちの205kmは高速道路化されている。過去に人海戦術で建設された粗悪な道路の補修改善やバイパス道路建設も、並行して行われてきた。主要な観光地をつなぐ長距離バス網はルートも便数も増え、主要な観光地へは観光専用の小型バスや豪華バスも運行している。1990年代初頭に導入された寝台バスが定着したため、長距離移動にともなう肉体的疲労もかなり軽減された。

1990年代には鉄道網の整備も目覚しかった。1997年に広西壮族自治区の南寧と昆明を結ぶ南昆鉄道が開通し、昆明と大理を結ぶ広通大理線も建設された。貴州省から広西壮族自治区にかけての貧困地帯を通り抜ける南昆鉄道は、貧困脱却の起爆剤としての役割も期待されている。1999昆明世界園芸博覧会を契機に、中国主要都市から昆明へ、昆明から石林・大理へと運行される観光専用列車も設けられた。いずれも、雲南観光の重要な旅客輸送機関に成長している。

雲南省内には現在計画中または建設中の鉄道路線も多い。大理まで延びた鉄道はそこから北上して、麗江・中甸といった著名な観光地を經由して、2025年までにチベット自治区のラサへとつなぐ壮大な計画もある。四川省宜賓市経由で内江市までを結ぶ内昆鉄道は2001年に開通する予定であり、雲南省は長江の水運利用と長江流域の観光市場の獲得を期待している。

昆明へのアクセスと雲南省内の交通インフラの改善により、1980年代の雲南観光を低迷させたボトルネックは大幅に緩和され、1990年代に雲南省は本格的なマスツーリズムの到来を迎えた。ところが、雲南省政府は今の状況に甘んじず、雲南観光をさらに次の段階へ押し上げるべく、GMS計画のもと国際交通網の整備にも取り組み始めている²⁹⁾。

昆明からミャンマーへ至る昆緬鉄道は、広通大理線をさらに西へ延長して、瑞麗経由でミャンマーへ入り、ラシオ経由でヤンゴンへ向かうルートにはほぼ確定した(図4参照)。雲南省内の昆緬鉄道建設は2015年の完成が予定されている。タイのバンコクに至る昆泰鉄道の方は、昆明から思茅・景洪を経由して、ミャンマーに抜けるルートとラオスに抜けるルートが計画されている。昆明から思茅までの昆思鉄道は玉渓あたりまで完成しており、大理と思茅を鉄道で結ぶ計画も存在する。一方、ベトナムのハノイに至る昆河鉄道は1992年に再開しており、すでに国際観光客の輸送機関としても機能している。GMS計画には、ベトナム・カンボジア・タイ・ラオスなどの参加諸国を鉄道で東西に結ぶ計画もあり、南北の鉄道計画とあわせて汎アジア鉄道建設構想と呼ばれている。

国際道路網の整備もGMS計画に列せられており、雲南省内ではミャンマー・ラオス・ベトナムへの既存道路の高速道路化が進展しつつある。1990年代初頭から準備が進められてきた瀾滄江—メコン河国際航路は、2000年4月に中国・ラオス・ミャンマー・タイの4カ国で『瀾滄江・メコン河通航協定』が調印された。この協定で2001年4月より、雲南省思茅港からラオスのルアンプラバン港までの国際航路が開設される。紅河に国際航路を開設する計画も航行可能調査を終えて、ベトナム政府と最終的な調整を行う段階に入っている。

GMS計画は参加諸国それぞれの思惑や内政事情もあり、国際環境の変容も想定できるので、

これら全ての計画が順調に進むとは考え難い。しかしながら、西部大開発とGMS計画を追い風として、少なくとも雲南省内では、今後とも交通インフラの整備が着実に進展していくと思われる。瀾滄江—メコン河国際航路の就航も決まり、昆明市内にはミャンマー・ラオス・タイの総領事館も開設され、いずれも観光ビザの発給業務を行っている。東南アジア国際観光市場との融合を目標としていた雲南観光は、これによって、その第一歩を踏み出したことになる。GMS計画のもとで国際鉄道・道路網が整備されていけば、雲南省と東南アジア諸国との結びつきはますます強化され、雲南省は東南アジア観光のゲートウェイとして、また、東南アジア観光の重要な結節点として発展していくに違いない。

IV 21世紀に向けての雲南観光戦略

(1) 西部大開発と雲南観光戦略

雲南省第十次5ヶ年計画(2001~2005年)の草案において、観光産業は第九次5ヶ年計画と同様に、雲南省の経済成長を牽引する重要産業と位置付けられ、その発展をさらに加速することが盛り込まれた⁽²⁰⁾。21世紀に向けた雲南観光戦略は、この草案を最終検討する全省旅游産業工作会议で、その一端が明らかにされた。

この会議では2001年から2020年までの観光戦略のスローガンとして、「一つの観光センター、五つの観光地区、六つの優れた観光ルート、八つの特色ある観光商品、三つの観光圏」の建設

20) GMS計画に関しては、アジア開発銀行のホームページに詳細な情報が掲載されている。アドレスは、<http://www.adb.org/GMS>。また、雲南省のGMS計画への取り組みや戦略に関する情報は、<http://www.yunnan.com.cn>の『專題報道』にリンクされている。GMS計画と雲南省の取り組みに関しては、改めて別

稿で論じたい。

(21) 2001年1月10日付け発表の「雲南省国民経済和社会发展第十個五年計劃綱要(草案)」。これには、『雲南日報』のホームページ(<http://www.yndaily.com>)からアクセスした。

が掲げられた⁽²⁵⁾。加えて、具体的な数値目標も、2001年は国際観光客105万人・観光外貨収入3.5億ドル・国内観光客4,100万人・国内観光収入199億元・観光総収入228億元に設定され、2005年までには国際観光客150万人・観光外貨収入5.5億ドル・国内観光客5,500万人・観光総収入300億元に増加させると打ち上げられた。

世界観光機関 (World Tourism Organization)・国家旅游局・雲南省人民政府が共同で作成した『雲南省旅游發展規劃總体規劃』も、2001年春に公表される予定である。そこでは雲南省内の23観光スポットが選定され、そのなかの7観光スポットは国際競争力を備えていると評価され、国家旅游局の批准を待って開発されるという⁽²⁶⁾。

21世紀の雲南観光をめぐるには、まさに右肩上がりの目標が設定され、観光開発ラッシュが押し寄せそうである。このような雲南省の強気の観光戦略と西部大開発構想は深く関連する。

中央政府が提案した西部大開発に呼応して、雲南省でも西部大開発における行動計画構想が練られ固まりつつある。その行動計画構想とは、「一つの路線を堅持し、二大優勢を發揮し、三大制約を緩和し、三大目標を成し遂げ、四大戦略を実施し、五大重点を建設し、六大関係を処理する」というものである⁽²⁷⁾。

一つの路線は实事求是の思想路線、二大優勢は自然資源の優勢・地理的位置の優勢、三大制約は不合理な経済構造と都市農村構造・脆弱な基礎設備・労働者の低い科学技術素養と認識されている。このような認識にたち、綠色經濟強省建設・民族文化大省建設・國際大通道建設が三大目標に、科学教育で雲南省を振興する戦略・持続可能な發展戰略・都市化戰略・「走出去」開放戰略が四大戰略に掲げられた。

五大重点には、基礎設備建設工程・生態環境保護建設工程・經濟構造調整工程・科学教育扶貧到富（貧困撲滅）工程・開放興邊富民（邊境振興）工程が据えられ、六大関係には、国家支持と自力更生との関係、社會主義市場經濟法則と東中西部社會主義大協力との関係、開發と改革開放との関係、資源開發と生態環境保護との関係、建設と民衆の生活水準向上との関係、開發と安定との関係が挙げられている。

ここで注目したいのは、三大目標である。第一の目標である綠色經濟強省建設は、四大戰略の持続可能な發展戰略や五大重点の生態環境保護建設工程と関連し、観光部門においては1999昆明世界園芸博覽会で示された生態觀光に通じる。第二の目標である民族文化大省建設は、雲南觀光の最大の焦点とも言える民族觀光と深く関連する。第三の目標である國際大通道建設は、

(25)「我省旅游業在“十五”期間總体布局和目标確定」、2001年2月27日付けの『春城晚報』の記事より。この記事には <http://www.yn.cninfo.net> からアクセスした。以下、スローガンの内容を具体的に示しておきたい。一つの観光センターは昆明を中心とする滇中觀光区。五つの観光地区は、①滇西北觀光区、②滇西南觀光区、③滇西觀光区、④滇東南觀光区、⑤滇東北觀光区。六つの優れた観光ルートは、以上六つの観光区に対応して、①「滇中高原觀光・リゾート・會議・イベント」観光ルート、②「滇西北シャングリラ生態文化」観光ルート、③「滇西南熱帯雨林及び多国」観光ルート、④「滇西邊境觀光及び地熱火山」観光ルート、⑤「滇東南カルスト地形景觀及び邊境の旅」観光ル

ト、⑥「滇東北歴史文化と省を跨いだ旅」観光ルート。八つの特色ある観光商品は、生態觀光・民俗（原文ママ）觀光・邊境觀光・イベント觀光・レジャーリゾート觀光・体育健身觀光・科学考察觀光・探検觀光。三つの観光圏は、省内觀光圏・國內觀光圏・國際觀光圏である。

(26)「新世紀雲南旅游發展藍圖凸現」、2001年1月16日付けの『雲南信息港』より。この情報には、昆明市のホームページ (<http://www.kmpg.gov.cn>) からアクセスした。

(27)例えば、「省府提出西部大開發行動計劃」、2000年6月18日付けの『滇池晨報』や、李嘉廷「綠色的雲南、特色經濟」『人民論壇』2000年第4期など。

四大戦略の「走出去」開放戦略と関連し、東南アジア諸国（大メコン圏）との国際交通網の整備を意味し、東南アジア国際観光市場との融合を目指す雲南観光戦略の基盤となるものである。

西部大開発における雲南省の行動計画構想に「観光」という文字は一切見えないが、むしろそれが前提として存在しているからこそ掲げられていないと思われるほど、三大目標は21世紀に向けた雲南省の観光開発と深く関連している。ここでは、雲南少数民族の社会文化的さらには政治的な動態を左右する民族文化大省建設の動向に注目したい。

(2) 民族文化大省建設への道のり

雲南省においては、自然景観や人文景観とともに、少数民族の伝統文化も観光資源と捉えられ調査され開発されてきた。雲南省で民族文化が商品化されてきた歴史は古く、毛沢東時代から政府要人の接待に、地元少数民族による歓迎のうたげは欠かせなかった。国際観光に門戸を開いた1979年頃には、路南石林風景名勝区内に立地する石林賓館で、地元サニ族（彝族の下部集団の一つ）による歌舞ショーが観光客相手に提供されるようになっていた。

1980年代になると、例えば、石林や大理における火把節（たいまつ祭り）や西双版纳の潑水節（水かけ祭り）など、少数民族の年中行事に多数の観光客が押し寄せるようになった。これ

らに観光資源としての可能性を見出した地元政府は、年中行事の場を整備して観光イベント化し、観光客に向けて本格的なプロモーション活動を行うようになる⁽²⁸⁾。レストランやホテルにおける少数民族歌舞ショーの提供も、1990年初頭には雲南省内に定着する⁽²⁹⁾。西双版纳民族風情園（1987年開設）や雲南海埂民族村（1992年開設）など少数民族テーマパークの設立も相次ぎ、雲南少数民族の「伝統文化」を展示して観光客の消費対象として提供する動きは、今や雲南各地に拡散している。

1990年代半ばには、おおよそ考え得るありとあらゆる少数民族文化が、観光開発の対象となる文化資源として認識されるようになり⁽³⁰⁾、雲南省政府もその開発に取り組むようになる。1999昆明世界園芸博覧会が目前に迫った1998年9月、雲南省長の李嘉廷は観光産業に対して八つの要求を出した。その第一には、自然景観・人文景観・少数民族風情など観光資源の全面調査の展開、第二には、観光資源のさらなる開発が掲げられ、特に少数民族風情と人文景観を重視することも添えられた⁽³¹⁾。ところが、自然景観や人文景観は国家から与えられた枠組みで制度化することができたのに対し、ここで強調されている「少数民族風情」に関しては、それを評価して制度化する枠組み自体がなかった。

雲南省の自然景観や人文景観は1990年代に制度化が急展開して、新たに観光資源として制度

(28)例えば、近年の石林県人民政府は観光産業をさらに振興するために、火把節だけでなく密枝節・彝家樂（彝族の新年）・賽装節などといった年中行事も、中国内外の観光客向けに提供しようと試みている。2000年1月10日付けの『雲南日報』の記事より。

(29)前掲注(6)によると、昆明市内の南園飯店が1988年春から少数民族歌舞ショーを行ったのがその始まりとされている。ただし、筆者の記憶では、1987年夏にはすでに、麗江で纳西族古老たちによるトンパ音楽ショー、西双版纳（曼景園）でタイ族による歌舞ショーなどが

行われていた。

(30)例えば、張保華主編『雲南文化資源研究與開發』雲南民族出版社、1994年など。

(31)<http://www.yn.cei.gov.cn/scxx/e1.txt> より。この他の要求は、①観光ブランド戦略の実施、②観光みやげの開発、③観光メディア戦略の強化、④観光インフラの強化と改善、⑤1999昆明世界園芸博覧会を起爆剤とした観光産業のさらなる発展、⑥観光産業に対する政府の指導の強化、であった。

化するに値するところはそう多くは残っていない。その一方で、少数民族側は自己の文化資本を主体的に運用して観光需要に対応してきたが、なかには雲南観光ブームに便乗した質の悪い「商品」も少なくなかった。後に少数民族側の主体的な対応を取り込む形で、雲南各地の地方政府も参入して、苛烈な観光開発競争を展開するなかで、粗悪な「商品」の乱造が加速していった。雲南省政府が民族文化大省建設構想を打ち出した背景には、このような状況があった。

雲南省では2000年末に、1950年代の大規模な民族調査に次いで、第二回目の総合的な民族調査が実施された。1950年代の民族調査の大きな目的は民族政策実践の基礎となる民族識別工作にあったが、民族識別工作は1980年代後半より事実上凍結されている。この第二回目の民族調査では、民族文化大省建設や将来の民族観光開発を見据えて、雲南少数民族がどのような文化資本を保有しているのかに焦点が当てられたものと思われる。

2000年末に発布された『雲南民族文化大省建設綱要』によれば、2005年までの目標として、①珍しく貴重な民族文化資源を発掘し、②民族文化に秀でた優秀な人材を育成し、③民族文化芸術作品を創作し、④民族文化標識工程を建設し、⑤民族文化の特色を備えた地域を建設し、⑥メディア産業において文化産業集団を組織する、などが掲げられている⁽³²⁾。また、①全民素質提高（国民資質向上）工程、②基層文化設備建設工程、③群衆性精神文明創建工程、④人材工程、⑤文化精品工程、⑥特色文化区建設工程、

⑦領域文化建設工程、⑧節慶活動工程、⑨民族文化資源救済・保護工程からなる九大工程と、新聞雑誌・出版・情報・映像音響・教育・体育・文化娯楽・芸術・民族民間工芸と服飾・広告の十大産業の育成を具体的に掲げている。

この綱要では民族文化大省建設にあたって注意すべき九つの関係にもふれられている。そのなかには、共通性と特殊性の関係、継承と刷新・保護と開発の関係がある⁽³³⁾。共通性と特殊性の関係では、地方色と多様性に富む雲南民族文化は中国社会主义文化の重要な構成要素の一つであり、その共通性と特殊性を有機的に結合しなければならぬ、と規定されている。つまり、中国社会主义文化と雲南民族文化は並列関係ではなく、前者が後者を包括するという構図で捉えられている。継承と刷新・保護と開発の関係においては、雲南諸民族の伝統文化は継承するだけでなく、不断に刷新して伝統的な特色を保持すると同時に時代特徴に富む優秀文化となし、保護するだけでなく、科学的合理的に開発して経済社会発展の推進力にすると述べられている。伝統文化の刷新と開発を許容する姿勢には、民族観光開発や観光産業の発展といったもう一つの目的が露骨に見える。

民族文化大省建設では、社会力量の発揮、つまり少数民族側や民間側からの主体的アプローチは歓迎されるものの、政府によるマクロコントロールも明記されており、党や政府の指導が重視されている。綱要のなかでは「優秀な民族文化の発揚」という用語が頻繁に用いられ、社会主义道德建設の強化も強調されている⁽³⁴⁾。こ

(32)民族文化大省に関する議論は、『雲南日報』ホームページにリンクされており、この綱要もそこから引用した。アドレスは、<http://www.yndaily.com/zl/culture/content/news>。

(33)この他は、文化と経済との関係、(外来文化との)交流と浸透防止との関係、改革と発展との関係、経済

利益と社会利益との関係、普及と向上との関係、繁栄促進と規範管理との関係、政府のマクロコントロールと社会力量の発揮との関係がある。

(34)一部分を抜き出すと、「正確な世界観、人生観、価値観、愛国主義・集体主義・社会主义・創業精神の発揚を樹立する」とある。

れと党や政府のマクロコントロールとを考え合わせると、「優秀か優秀でないか」の判断は、社会主義道徳建設を基準に最終的には行政側に委ねられることになる。

民族文化大省建設の具体化に向けて、2000年9月に『雲南省民族民間伝統文化保護条例』が制定された。報道によると、この条例は、民族民間に伝承されている優秀な伝統文化の救済・保護・発揚、さらには民族文化資源の合理的な開発・利用を規定するもので、国際競争力を備えた民族文化産業体系の樹立に向けた法的支援であると評されている⁽³⁵⁾。条例では、総則で「保護為主、搶救第一、政府主導、社会参与（保護が主で、緊急救済措置が第一、政府主導のもと、社会も参与する）」という方針が明示され、省級の民族民間伝統文化传承人・民族民間伝統文化郷・民族民間伝統文化保護区の設立規定も定められた。この条例により、雲南省は少数民族文化を制度化する独自の枠組みを創出したことになる。

すでに検討が始まっていた民族文化生態村などとあわせて⁽³⁶⁾、今後こうした枠組みにより、21世紀に向けて、雲南省の「優秀な民族文化」は観光資源として制度化され開発されてゆくに違いない。一方その過程で、「劣悪」と認定された民族文化は、過去に粗製濫造された質の悪い民族文化商品などととも淘汰されていくと思われる。いずれにしても、民族文化大省建設構想のもと、観光開発を強く意識した政府の強い働きかけのなかで、雲南少数民族の伝統文化が取捨選択され再編成されていくことは間違いないであろう。

V おわりにかえて

高度成長期が終焉を迎えようとしていた頃の日本では、「ディスカバー・ジャパン (Discover Japan)」という刺激的なキャッチコピーのもと、失われつつある日本の原風景を求めるような観光がブームとなった。国内観光客にとっての雲南観光は、雲南独特の自然景観と人文景観で広大な国土の多様性を確認し、雲南少数民族の存在から中華民族の多様性を確認するという意味で、「ディスカバー・チャイナ (Discover China)」と言えるかもしれない。近年では積極的なメディア戦略により、中国国内でも雲南イメージが構築されているので、むしろ「発見」を擬体体験するという意味で「リディスカバー・チャイナ (Rediscover China)」であろうか。

雲南少数民族の伝統文化も、1980年代は主として国際観光客のまなざしのなかで、1990年代からは漢族を主体とした国内観光客のまなざしも加わり、客体化され商品化され消費されてきた。その過程で、少数民族側や民間側からの主体的な働きかけが重要な役割を果たしてきたことは言うまでもない。

ところが、21世紀に向けての観光戦略に民族文化大省建設構想が組み込まれたことにより、今後は党や政府がその過程に介入し指導的な役割を果たすことになる。雲南少数民族の存在は中華民族の多様性のなかに再定置され、その伝統文化も中国社会主義文化の共通性のなかに位置付けられ、「観光開発」・「社会主義道徳」・

(35) 「雲南民族民間伝統文化保護条例加緊制定」、2000年6月2日付けの『雲南日報』の記事より。

(36) 雲南最初の民族文化生態村は邱北県仙人洞村で、この試みは民族文化大省建設や観光大省建設と連動して

おり、これを模範として雲南全土に普及させると報道された。2000年4月26日付けの『雲南日報』の記事より。

「社会主義精神文明建設」などをキーワードに再編成されていくものと思われる。この営為は「伝統文化」をめぐるオーセンティシティ問題の域を超えて、より包括的な文化的統合さらにはその政治的な操作にまで踏み込んでいる。

21世紀の雲南観光をめぐるっては、中国内外からの観光客たちが「中国再発見」する一方で、雲南省内ではそのまなざしのなかで政府主導の「リコンストラクト・チャイナ (Reconstruct

China)」が同時進行し、両者の弁証法的な相互作用が活発化すると予想される。

雲南省は中国民族観光の成功事例と捉えられており、他の中国少数民族地帯の政府もその動向に注目しているため、雲南省での経験や実験が拡散していく可能性は高い。政府主導の「中国再構築」が試みられる過程で、雲南少数民族がどのような対応を見せるのか、今後とも注目していきたい。